お伽草子における説話引用態度

――志賀寺上人譚を通して――

柴田芳成

『俊頼髄脳』以来著名な志賀寺上人と京極御息所の恋の物語がある。『俊頼髄脳』に語られる物語は次の通り。

その御息所の、昔は三井寺のかたはらに志賀寺とて、ことのほかに験し給ひける所ありけるに、参り給ひけるに、かの寺近くなりて、所の様のをかしくおぼえ給ひければ、御車の物見を広らかにあけて、水海の方など見まはさせ給ひけるに、いと近き岸の上にあさましげなる草の庵のありけるが、窓のうちよりことのほかに老い衰へたる老法師の白き眉の下より目を見合はさせ給ひたりければ、「いとむつかしきものにも見えぬるかな」とおぼして、引きいらせ給ひにけり。さて、帰り給ひて後、またの日、老法師の腰ふたへにかがまりたるが、杖にすがりて参りて、中門の辺にたたずみて、「昨日志賀にて見参し侍りし老法師こそ参りたれと申させ給へ」と申しければ、しばしは聞き入るる人もなかりけれど、ひねもすに居暮らしてあまりいひければ、聞きあまりて、「かかる事申すものなむある」と申しければ、「しか、さる事あらむ」と仰せられて、南面の日隠しの間に召しよせて、「如何なる事ぞ」と問はせ給ひければ、しばしばかりためらひて、「志賀にこの七十年ばかり侍りて、ひとへに後生菩提の事を営み侍りつるに、はからざるほかに見参をして後、いかにもこと事なく、今一度見参せむの心侍りて念誦せむの心もなく、時にも向かはざりつれば、年ごろの行ひのいたづらにならむずる事を悲しび思ひて、もし助けもや、せさせおはしますとて杖にすがりて泣く泣く参りて侍るなり」と申しければ、「いとやすき事なり」とのたまひて、御簾を少し巻き上げて見えさせ給ひければ、面の皺数も知らず、眉の白き事雪よりもけにて、まみなども皆おいかはりて、人ともおぼえず、まことに恐ろしげなる様してまぼり入りて、とばかりあ

りて、「その御手をしばし賜らむ」と申しければ、申すにしたがひて御手を差しいださせ給ひたりけるを、わが額にあてて、よろづもおぼえず泣きて、かの手にとるからにといへる歌を詠み申して、少し居のくやうにして、「この世に生まれ侍りて後、九十年に及び侍りぬるに、まだかばかりの喜び侍らず。この縁をもて、もし思ひの如く弥陀の浄土に生まれなば、必ず導きたてまつらむ。また、浄土にも生まれさせ給ひたらば、必ず導かせ給へ」と申して泣きければ、御返し、

よしさらばまことの道のしるべしてわれをいざなへゆらぐ玉の緒

とぞ仰せられける。これを聞きて喜びながら、泣く泣く帰りけりとぞ、能因法師、帥の大納言に語り申しけるに、（日本古典文学全集『歌論集』、表記は適宜改めた）

志賀寺の上人が参詣に訪れた京極御息所を見初め、その思いに堪えきれず、老いの身も省みずに御所に推参、心の内を伝え、その手を取って「初春の」歌を詠んだところ、御息所からも「よしさらば」の返歌があり、上人は満足して帰山した、という説話である。

この二人の物語は、中世、「恋の例し」を語るものとして様々な作品中に引用された。本稿では、お伽草子作品を中心に志賀寺上人譚が、本筋の物語の流れの中で、いかに吸収、使用されているかを考察してみたい。

一

本題に入る前に、手続きとしてお伽草子の時代以前の志賀寺上人譚のあり方を確認しておく。先から述べている通り、本話の初出は『俊頼髄脳』にある、能因が俊頼の父大納言経信に語ったと伝えるものである。そこでは「初春のはつねの今日の玉はゝき手にとるからにゆらく玉の緒」の和歌の注釈として導かれたものであって、田舎での子日の習俗、美称として「玉」字を用いること、京極御息所の醍醐天皇入内の折、宇多院に横取りされる説などが述べられた後に語られる。

物語では九十歳に及ぼうかという老齢とされているが、志賀寺上人がはたしてどういう人物であったかは不明である。対して、京極御息所は左大臣時平の娘褒子、容姿について本文中にはふれられないが、『俊頼随脳』に語られる宇多院が奪ったという話があり、またその宇多院と河原院に泊まった折には融の霊が現れて御息所を求めたという（『古事談』巻一ノ四、『江談抄』巻三など）。元良親王との恋も伝えられており（『元良親王集』）、魅力的な女性であっただろうと推測できる。(一)またこ

こに描かれた、僧が貴女への恋心を告白して対面を得、その思いを晴らすという物語は『発心集』「玄賓、念を亜相の室に係くる事　不浄観の事」（巻四ノ六）に同じい（夫の大納言が仲介する点、玄賓が正装する点は異なる）が、玄賓が貴女の姿に不浄観を凝らして妄念を克服するのと比べて、恋しい人の手にふれたことで気を晴らす志賀寺上人の方がより人間味（俗人味）があるといえようか。

本話は「初春の」歌に対する注釈にそえて以後の歌学書に継承される。(二)それらの中では「玉ははき」「ゆらく」「玉の緒」といった語句の注解や子日の習俗の説、また『万葉集』中に同歌が大伴家持作としてあることから誰の真作かということとともに話題として取り上げられる。『詞林采葉抄』では「初春の」歌を家持歌としながらも「彼志賀寺ノ上人宮息所ノ御手ヲ賜テ、此歌ヲ詠シケル、当所誦詠ト申ナカラ心ノ中哀ニコソ」との評が記される。

ただし、『袖中抄』では「無名抄云、……」、『古来風体抄』では「俊頼朝臣口伝に申したるは、……能因法師の、大納言経信卿にかたりけるとて申したるは、……」などと『俊頼髄脳』に基づく旨が記され、そこでの物語は、叙述が短くなる場合はあっても説話としての内容的な成長、変容はほとんどみられない。

また、そのように繰り返し記しとどめられる中で、上人譚が知識としても広がりをもったことは和歌の実作の面からもうかがえる。（歌番号は『新編国歌大観』による。以下も同じ）

手にとりてゆらく玉のを絶えざりし人ばかりだにあひみてしかな　　公能（『久安百首』一六二・恋）

しるしあれといはひそ初むる玉ばはきとる手ばかりの契なりとも　　（『長秋詠藻』四八六・初恋）

玉箒手にとるほども思きやかりにも恋を志賀の山人　　家隆（『六百番歌合』八四八・老恋）

これらの歌は志賀寺上人の恋心を汲んだものと解される。近世の連歌学書である『産衣』には「玉箒」の項の内、「初春の」歌に対する『歌林良材抄』の説を引いたあと「されば共、恋の題にハしが寺の上人の心をよめる歌おほしと也」との記述がある。(三)

二

志賀寺上人説話が語られたのは歌学書だけに止まらない。歌学の世界を出た上人譚は、その流布につれ内容、理解にも変化が現れはじめる。

『とはずがたり』（巻三）、有明の月との関係を告白した後深草院二条に、後深草院が答える場面。

不思議なりける御契かな。……昔のためしにも、かゝる思ひは人を分かぬ事なり。柿本の僧正、染殿の后の物の気にて、あまたの仏菩薩の力尽くしたまふといへども、つゐにはこれに身を捨給にけるにこそ。志賀寺の聖には、「ゆらぐ玉の緒」と、情けを残したまひしかば、すなはち一念の妄執を改めたりき。

（新日本古典文学大系）

「心得て、あひしらひ申せ」と二人の関係を受け入れる後深草院が「昔のためし」として口にした上人譚はごく短いものであった。「情けを残したまひしかば、すなはち一念の妄執を改めたりき」と語られるのは、御息所が上人の好意を受け止めて歌を返し、そのことによって上人の妄念も晴れたということ。かつての御息所の行為を二条に手本として示した院の心中にあった物語は、恋しさに堪えきれず心情を吐露した上人とその思いに応えた御息所というものであって、『俊頼髄脳』に描かれたところと同じとみてよいだろう。

だが、その一方では次にみるように『俊頼髄脳』とは語りの位相を異にした文脈も現れる。そこでは本話のもっていた世界にやや変化が現れるように思う。

『宝物集』（巻五・第二種七巻本）、「不邪淫」について述べる件。

浄蔵法師が験徳をあらはすをはりに、真の弟子をまうけ、滋賀の上人の行業をつみし、貴女にゆづる事ありき。花山の法王の、十善の位をすて給ひし、乳母子におちたまふ。和泉の僧正の高位にのぼり、国母に名をたつ事有。明達律師は母をおかし、順源法師はむすめを嫁ぐ。この道におゐてしのびがたくぞみえ侍るめる。

……滋賀聖人の、貴女に行業をゆづると云は、京極の御息所、時平左大臣のむすめ、滋賀寺へまいり給へりけるを、みたてまつりて、対面し給へりけるをよろこびて、御手をとりてよみ侍りけり。

初春のはつ音のけふの玉はゝき手にとるからに
ゆらぐ玉のを

とながめて、今生の行業をゆづりたてまつると云事なり。（以下『万葉集』の家持歌、宇多法皇の横取りのこと）

（新日本古典文学大系）

「第三に不邪淫と申は、」と語り出された本件は、女人罪業観のもと、天竺震旦の僧や仙人が女性ゆえに身を誤ったことが記され、「吾朝の事はあまりに耳近に侍れども、それも少々申侍るべき也」として引用箇所に続く。

ここでの志賀寺上人説話は、上人の行動の描写のみで御息所の応対にはふれない。『俊頼髄脳』の物語後半部、御息所「よしさらば」の返歌を記さず、結果として上人の思いが晴れたことは語られない。上人から御息所への

思いがつのり、行業を譲ったという段階で物語は閉じられる。そもそも「みたてまつ」ってから「対面」に至るまでに『俊頼髄脳』に描かれた上人の煩悶はあったのか、出会ったその場で手を取ったとも読みうる文章である。

『宝物集』筆者が本話を書き記すにあたって、上人が御息所に「行業をゆづ」ったことに主眼を置いたのであろうことは、この短い叙述の中に同句が三度記されることから明らかであろう。「行業をゆづ」るという文句は『俊頼髄脳』にはみえない表現である。これは『袖中抄』にある「我年九十ニヲヨビハベリナムズルニ七十年ハヒトヘニ後生菩提ノイトナミ也　キミニミナ廻向シタテマツルベシ」との叙述が比較的近いといえる。ただし当然、「廻向シタテマツル」と「行業をゆづ」るとでは異なる。(四)

前後の説話では、浄蔵法師は「珍皇寺の北にある八坂の塔のゆがみたるを、護法してなをさするほどの験をもちながら、子をまうくる」、花山法皇は「乳母子に中務と云女房におち給ふ」と語られ、天竺の一角仙人は「玉女のあそぶとみて心をうつして、験をうしなふ」と記される。『宝物集』筆者の至上とする仏法の前において、恋愛の迷いがいかに大きな障害となるかを語っているわけである。とすれば、上人譚のあり方はどうか。前後の文脈とは別に本話だけを好意的に解釈することはできない。説話に付される読みは可変的であって、志賀寺上人も他の列挙される人々と同じく、僧位にありながら愛執に抗しきれなかった人物として挙げられたことになる。ここにまず『俊頼髄脳』との距離が認められよう。

『太平記』中の「身子声聞、一角仙人、志賀寺上人事」の段（巻三七）での上人譚は御息所が「志賀ノ花園ノ春ノ気色ヲ御覧ジ」た折の出会いとし、上人は湖畔で「湖水水波閑ナルニ向テ、水想観ヲ成テ、心ヲ澄シテ只一人立給タル」と設定、歌の贈答の他には二人がほとんど言葉を交わさない、御息所返歌の上句を「極楽の玉の台の蓮葉に」とするなど独自の一話を構成し、『俊頼髄脳』に通じる面もある。(五)だが、文脈の中でみるとき、身子声聞、一角仙人を含めた三説話に対して「カヽル道心堅固ノ聖人、久修練行ノ尊宿ダニモ、遂ガタキ発心修行ノ道ナルニ、家富若キ人ノ浮世ノ紲ヲ離レテ、永ク隠遁ノ身ト成ニケル、左衛門佐入道ノ心ノ程コソ難有ケレ」と評されるように、前段「尾張左衛門佐遁世事」に語られた斯波氏頼の出家、およびその道心の堅固さをいう逆説として位置する。仏教者としてのあり方と、人として断ちがたい恋の心との葛藤という視点から本話が用いられるわけである。

ところで「行業をゆづ」るという表現は他作品中の上人譚にもみえる。

『源平盛衰記』（巻四八）では建礼門院の六道語りのうち、宗盛・義経との噂が立ったと語られた後、畜生道の例え、姦淫の問題として述べられる一例に挙げられる。

寛平法皇の京極御息所は時平大臣の御娘、志賀寺詣の御時、彼の寺の上人心を懸け奉り、今生の行業を譲り奉らんと申せば、

よしさらば真の道のしるべして我をいざなへゆらぐ玉の緒

と打詠め給ひて御手を授け給ひけり。(六)

（新定源平盛衰記）

前後には天竺の例として術婆訶、鳩那羅太子の恋、震旦では則天武后と張文成、玄宗と楊貴妃の説話が引かれ、「吾が朝には」孝謙天皇と道鏡、業平と五条后あるいは二条后、染殿后と柿本僧正、女三宮と柏木など物語、歴史に著名な男女の名が並べられる。前の『宝物集』ほどには否定的ではなく、むしろ後にみるお伽草子作品と同じく、「恋の例し」尽くしの観がある。ただし建礼門院の語りとして恋愛全般を「畜生道に言ひなされたり」として一括している点注意しておこう。

さらには、上人の恋を積極的に妄執として語る一群がある。その恋のために上人の姿形が鬼と化したというのである。

『三国伝記』「志賀寺聖人恋路事」（巻六第二七）

和云、志賀寺上人ト云フ聖アリ。京極ノ御息所ト申シテ、時平左大臣女、比叡参リシ給ヒケル道ニテ見合、御手ヲトラヘ奉リテ、

初春ノハツネノ今日ノ玉箒手ニトルカラニユラグタマノ緒

此ノ歌家持ノ集ニ有リ、ト詠ジテ、多の行業ヲ譲、忽ニ紺青鬼ト成リケルコソヲソロシケレ。

（中世の文学）

ここでも時間の経過が不分明で、『俊頼髄脳』にみられた自らの長年の修行を思い返して逡巡し、それでも恋しさに堪えきれなかった上人の姿はない。その思いを受け止める御息所の押さえの効いた対応は描かれることすらない。上人が恋に狂う姿が前面に押し出される印象の本話の主題は、続けて記される述婆伽、張文成とともに恋に身を失う例であって「可恐、可慎」と結ばれるのに明らかなように、恋にとらわれる恐ろしさにある。

紺青鬼説話は柿本僧正と染殿后の説話をめぐって成長したものであるが、そこに描き出されるのは恋の妄執であり、その虜となって鬼と化する僧の姿であった。(七)

志賀寺上人譚が紺青鬼説話の影響を受けるのは、恋の物語の登場人物が僧と后といった相似が大きいであろうが(八)、それに加えて、上人譚を伝える人々が上人の「行業を譲る」姿に何もかも投げ出して恋に没入していく様

を読みとったからではなかろうか。

上人の紺青鬼化は次のようにも語られる。

『河海抄』巻二十（手習）「よき女のすみ給し所にすむつきて」の注として『古事談』『松月上人記』記載の真済・染殿后の紺青鬼説話を引いたあと、

此滋賀上人朝慤上人等如此例おほし如何(九)

（角川書店『紫明抄河海抄』）

と記され、注釈、学問の世界にも志賀寺上人の鬼化が語られていた。

『妻鏡』

志賀寺の聖人は、三密の行に功を運びしかども、一念の妄心に依て、青鬼と成と云り。

（日本古典文学大系）

『和漢朗詠集和談抄』「恋」一九二「我恋は」歌の注釈のうち。

彼ノ天竺ノ述□伽ハ、后ヲ恋テ、ホムラトナリ、我朝ノ上人モ、其下モエヲ志賀寺ヤ、ヲモキカ上のサヨ衣、アヲキ鬼トソ成ニケル。(一〇)

（和漢朗詠集古注集成二）

こうしてみると、志賀寺上人の鬼化の源として柿本僧正の説話があったとしても、上人に対しても独自に、恋のために身を変じたと認める説が広く受け入れられていたであろうことがうかがえる。

歌学書の中で『俊頼髄脳』と同じ話が繰り返し記され、『とはずがたり』のように原態を伝える上人譚がある一方で、歌学書の世界を離れた上人譚は、差し出した手とそれを受けるという小さな動作に込められた高潔さと思いやり、あるいは和歌を通じた恋の昇華を語るのではなく、仏教の立場から否定されるべき対象として「恋の断ちがたさ、恐ろしさ」、究極の姿としては妄執のために鬼と変ずる、と語る文脈に乗せられることが多いようである。それが連続的に展開したものであるかどうかは判じがたいが、登場人物二人の立場が僧と后という僧俗、身分の別を越えようとした恋であること、によって好奇の目で捉えられる一面があったことは否定できないだろう。

三

現在では、お伽草子はかつていわれていたように単純、幼稚な読者向きの平易な読み物としてのみあったわけではなく、個々の物語中には『古今和歌集』『伊勢物語』などの古典注釈との連関をはじめとして学問としての文学営為の反映のあることが知られている。(一一)志賀寺上人譚もお伽草子中で、登場人物たちの語る「恋の例し」として諸処に散見する。(一二)

今回の調査で見出しえた上人譚は決して一様なあり方ではなく、それぞれの作品内での必要に応じ、その叙述には長短かなりの幅がある。以下に個々の本文を物語中での使用場面、特徴などを参考として加えつつ挙げる。参考としてお伽草子との近さがいわれる仮名草子の二作品（『恨の介』『薄雪物語』）も付した。なお本文の掲出にあたっては私に漢字、句読点、歌句に「」を付けるなど表記を改めた。

①『じぞり弁慶』（『室町時代物語大成』六　一八九）

かの志賀寺の上人の、京極の御息所を見奉りて、思ひの炎に焦がれけんもかくやと思ふばかりなり。

熊野別当が、参籠する二条大納言の姫を見初める場面、別当の心中である。引用箇所の直前、風に吹き上げられた御簾の隙間から見かけた姫の姿に一目惚れした別当が「我が房に帰りて勤めせんとすれども、胸の炎に身を焦がし、仏に向かって大息をのみつき給ふ」とあり、我が身を上人のありさまに重ねて思うのである。本筋である熊野別当の心情を例えるために添えられたにすぎず、上人譚は切りつめられた叙述となっている。なお本作品の源と考えられる『義経記』『弁慶物語』にはこのような描写はない。

②『秋月物語』（室町時代物語大成一　八）

三条の御息所は、人の思ひを懸からじとて志賀寺の上人に御手ばかりを結び給ふとかや。

中将からの文を拒む愛敬の君に愛子の君が人からの好意を受け止めることの大切を説く場面。引用箇所の前には小町零落の話を挙げる。ここでは上人の恋の相手が「三条御息所」とされるが、誤解、混乱に属するものであろう。

③『判官みやこはなし』（室町時代物語大成十二　三六五）

京極の御息所はいかなれば、志賀寺の上人に情けをかけ、御手ばかりを許し給ふ。

女房更級の手引きを得た御曹司が鬼一法眼の三女に対面、「御側近く居直りて問わぬ思ひの物語をのたまふ」場面。後にみる『浄瑠璃十二段』にも著名な次々と古今の恋の例しを繰り出す、枕問答といわれるものである。ここでは前後に業平と二条后の話、足利山妙天神の話がそれぞれ語られる。

④『みなつる』（室町時代物語大成十三　三八八）

志賀寺の上人は八十三の御年、京極の御息所を恋奉り、御手ばかりを賜りしも及ばぬ恋と承り候、昔が

今に至るまで尽きせぬ物は恋路なり。

『判官みやこばなし』と似た結構の物語。しんけいの末女皆鶴に義経は「それがしも及ばぬ恋の物語、語り聞かせ参らせん」と口を開く。上人譚にはじまり、以下に天竺の阿閦夫人、玄宗と楊貴妃、業平と二条后、光源氏と紫上、柏木と女三宮、桂海律師と梅若、小町と深草少将の故事を続ける。またここでは上人の年齢を八十三歳とするが、同様の記述は『御茶物かたり』『雀さうし』『たまむしのさうし』『浄瑠璃十二段草紙』『薄雪物語』にもみえる（ただし『雀』は七十四歳）。『俊頼髄脳』以来、修行七十年生年九十に及ぶ、あるいは八十にあまるとあるものの明確に年齢を記したものはない。直接本話とつながるわけではないが、老人の年齢として八十三歳にはひとつの文学伝統があることを森正人氏が指摘されている。(一三) 従ってこの年齢設定もその伝統に準じたものと考えられようか。

⑤『大原御幸』（室町時代物語大成三　八二）

御息所は志賀寺の上人に、「まことの道にしるべせよ」とて、御手を与へ給ひき。

『平家物語』による。前記と同じく建礼門院六道語りのうち畜生道の例えである。天竺の術婆訶、鳩那羅太子、本朝では孝謙天皇、染殿后、女三宮を挙げる。「大方、夏虫や秋の小鹿、草むらを恨み、森の獣までも、ただこの道に迷ひて命を失ふ習ひ、罪深くぞ覚ゆる」と語られ、恋をいずれは身を滅ぼす姦淫の問題として否定的に捉える。

⑥『赤松五郎物語』（室町時代物語大成一　七）

我が朝の志賀寺の上人は、京極の御息所を恋奉る。

御情け深くして、御手ばかりを賜りけるとかや。

播磨国の赤松五郎の見た夢の中での物語。業平と二条后の逢瀬をみた五郎が、自分も二条后と会ってみたいと尼公に取り次ぎを頼む場面で用いられる。上人譚の前には張文成と楊貴妃の話を引き、身分違いの恋が成就する例として語られる。

⑦『御茶物かたり』（室町時代物語大成三　八〇）

ここに例への候ぞや、志賀寺の上人は八十三にて、二条の后を恋させ給ふとき、御手ばかりとやらん、又、御茶ばかりとやらん、きこへしに、浜の真砂の数々に、心を尽くし給ふとも、頭の雪は春来れど、また溶けやらぬ心地して、三途の胸の思ひとならせ給ふと承る。

「茶という事は、ひきかえ〳〵ても、年寄りたる人も精を延べ、心をいさめ息災なる事、疑ひなし。ここに例へ

の候ぞや」とあって引用箇所に続く。本文では「ちゃ」と「て」の洒落であろうが、それは措いても老人の恋という点を正面に据えているのは本作の特徴である。狂言『枕物狂』でもシテの老人が語る「恋の恐ろしい物語」に上人譚、柿本紀僧正説話が挙げられる。(一四)またここでは上人の恋の相手を二条后とする。『たまむしのさうし』『恨の介』(『秋月物語』は三条御息所)でも混同されている。二条后は業平との恋で著名であり、恋の例としてもしばしば上人譚と前後して引かれる。本稿はじめに述べたように、京極御息所も恋する女性として有名であり、それゆえの混乱かと思われる。

⑧『道成寺物語』(室町時代物語大成十　二九六)

志賀寺の上人は道心堅固の聖なれども、京極の御息所に恋慕して御手の契りに浮き名を流し。

「それ淫欲の道ほど恐ろしき物はあらじ。」と語り出された物語の序にあたり、一角仙人、花山法皇の説話に挟まれる。三話を挙げた後、「此の他、女のために世を失い、命を滅ぼせし人々、古、今までその例し多き中に」として道成寺の物語へ導入される。花山法皇の説話を引くのは『宝物集』に同じ。上人譚は「浮き名を流し」とあって、恋の不幸をいう否定的な文脈で用いられている。

⑨『いそざき』(室町時代物語大成補遺一　四二七)

又、日本にては、まづ志賀寺の上人は御息所を恋奉り、御手ばかりの情けにて、六十余年の行を空しくなして、三界を流浪し給ふ。

後妻打ちの物語を語り終えた後、「世界の人は皆女房ゆへに、身をも家をも失ふなり」と周幽王と褒似、玄宗と楊貴妃、上人譚、小町と深草少将、月盆経説話を引く。「六十余年の行空しくなして、三界を流浪し給ふ」とある通り、恋の不幸として取り上げられる。ただその後の論は道成寺説話、業平色好み、西行の発心成仏にふれて恋心を晴らすことの大事へと展開する。『道成寺物語』と同じく女人忌避観が底流する。

⑩『横笛物語』(影印室町物語集成　第一輯)

志賀寺の上人は、京極の御息所を恋ひ奉り、願わくは妙なる御手ばかりを賜り候へと、六十四(ママ)年の行ほう(ママ)を空しくなして、三界流転し給ふも、無用の恋の末なり。

『横笛物語』の冒頭に、女三宮が柏木と通じて薫を産んだことに続けて記される。『横笛滝口の草子』諸本のうち、如上の女三宮のこと、上人譚を置くのは本書(慶応義塾図書館蔵室町末期写本)のみである。上人譚の後、「見る恋、聞く恋、恨む恋、逢ふて逢はぬ恋こそ中々よ

しなけれ。」とあり、横笛の物語本編を一つの恋の顛末の物語と読んだ事を明かしている。上人譚はその折りに思い出された、不幸な結末をむかえる「恋の例し」であったわけである。

⑪『雀さうし』(室町時代物語大成七　二一七)

我朝の志賀寺の上人は御息所を恋しまいらせ候て、七十四の年、南面の日隠しの際まで召されしに、御数珠を着、さにまいらせ候、あくるとて、「初春の初音今日の玉箒手に取るからに揺らぐ玉の緒」と申給ふに、御息所、御返事「よしさらばまことの道のしるべして我を誘へゆらく玉の緒」とあそばしたりき。

鳩の阿闍梨が雀の姫愛女に言い寄る場面、鳩の語り。本作品において懸想する鳩が「年寄り」の「阿闍梨」であるという設定自体、志賀寺上人を意識してのものであろうし、雀の姫が鳩を「広縁の傍らまで召して、御簾の内」にて対面することも同趣向、語り手の鳩と上人とがだぶらされている。「かかる道に迷うこと、我が身一つに限らず」として引かれる恋の例しは、釈迦と耶輸陀羅、三蔵と波斯匿王女、一行阿闍梨と楊貴妃、志賀寺上人、浄蔵と染殿后である。(一五)また『ふくろう』でも、直接上人譚を述べる箇所はないが、八十三歳の老ふくろうが若い鶯姫に恋するところから始まっており、影響が考えられる。(一六)

⑫『たまむしのさうし』(室町時代物語大成八　二五三)

昔、志賀寺の上人は八十三の年、御息所を見初め給ひてより恋となり、御手を取り給ひて詠み給ふときく、「初春の初音の今日の玉箒手に取るからに揺らぐ玉の緒」とあそばし、二条の后へ贈り給へば、やがて御返歌に、「いざさらばまことの道にしるべして我を誘ゑゆらく玉の緒」とかやあそばし、ついに一夜はなびき給ふと承る

いほむしが玉虫姫へ送った恋文。いほむしが「心に思う様、年寄りと申、しかも入道様して若き姫君の方へ玉章を送らん事、恥ずかしくは思へども」というのは『雀さうし』と同じく、登場人物の設定自体が志賀寺上人譚のパロディである。先行する古典作品をさかんにもどいてみせる異類物の世界である。「ついに一夜はなびき給ふと承る」と従来ない展開を加えるのは、いほむしが玉虫を口説き落とすための付加。また御息所(後には二条后とあるが、当然同一人物を指すだろう)返歌の初句を「いざさらば」とする。これは『浄瑠璃十二段草紙』『新古今聞書』『薄雪物語』に同じ(ただし『薄雪』は上人歌とする)。

⑬『ひめゆり』（室町時代物語大成十一　三三七）

又、志賀寺の上人は京極の御息所を一目見て、あら美しとゆふ雲の胸の月を隠し、深夜の窓の前には灯火を掲げ、持経を開けばしんならんをきり、文字を埋み、壇に上り鈴を振れば、阿吽の二字を忘れてただ茫然とうちあきれて御座します。御息所聞給ひ、人の思ひを蒙るは恐ろしき事也と、上人を召て僅かに御簾越しに御手をさし出し給へば、上人御手を取り、顔にあてて、「初春の初音の今日の玉箒手に取ばかりゆらく玉の緒」と詠じ、護摩の壇張廃れ、金仏苔むし、絵像風に乱れ、尊位の行徳忽ちに空しくなり侍りけるとかや。かく尊き人だにも、恋路の因果は免れ給はずとこそ承れ。

牡丹の局が姫百合に、智者上人も恋には迷うことの例として語る。上人譚の前には和泉式部と風猛山上人の話を挙げる。御息所に恋した上人の苦悩が詳細に描かれ、のち身を滅ぼすことまで述べる。

⑭『はにふの物語』（室町時代物語大成十　三二二）

又、志賀寺の上人も京極の御息所を恋参らせて、人目も顧みず参り給ひければ、御息所御手を出し給ふ。彼上人、御手を取らせ給ひて額に当てて、よろづを覚えず泣き給ひて、「手に取るからにゆらく玉の緒」といへる歌を詠みて、九十年に及び侍りて候に、かばかりの悦侍らず、いまは心に懸かる事なければ弥陀の浄土へ生まるべし、此縁を以て必導き参らせんとなり。さてこそは、御息所の御返事にも、「よしさらばまことの道のしるべして我を誘へゆらく玉の緒」とはあそばされたりければ、（…常陸帯の事…）また、限りなき御息所も上人などにさへ嘆きを止め給ふぞかし。

届けられた文につれない返事をする大納言の姫に弁の局が語り聞かせる場面。本作品中には様々な和歌の故事が引かれること、前掲本文も『俊頼髄脳』に近い文章で構成されていることから、歌学書系統の典拠によったと考えられる。

⑮『愚痴中将』（室町時代物語大成四　一一六）

志賀寺の上人は、京極の御息所を見奉り、その俤忘られで、御簾の際迄参り、妙なる御手を給て、「手に取るからにゆらく玉の緒」と詠じ、「我を誘へ」と宣給て、まことの道に入、心の月曇りなくおはせしかども、情の道には迷ひ給ふ。

二十余歳となっても男女の道、大和言葉を知らぬ「惚れ人」三位中将に、その母が教え諭す場面。「夫婦の道」

は伊弉諾・伊弉冉にはじまり、佐世姫、宇治橋姫、源氏、業平、柿本僧正と染殿后、白楽天の詩句を説く。

⑯『浄瑠璃十二段草紙』（新潮日本古典集成『御伽草子集』）

いかなれば志賀寺の上人は、御年八十三と申すに、京極の御息所を恋ひたてまつり給ふ。御息所は、あまりにその面影のいぶせさに、御年十七と申すに、御簾の外まで御出ありて、御手ばかりを奉る。上人は御手ばかりを賜はりて、一首の歌をぞあそばしける。「初春の初音の今日の玉箒手に取るからにゆらく玉の緒」とありければ、御息所聞こしめして、「いざさらば真の道にしるべして我を誘へゆらく玉の緒」上人は御手ばかりを賜はりて、三度御胸に押し当てて、つひにその恋遂げたりしかば、御息所はただならず、御懐妊ありて、ほどなく越前の国、敦賀の津と海津の境なる、愛発山にて御産の紐をぞ解き給ふ。かれを取り上げ見給へば、面は六つ、御手は十二あり。もとはあらし山と申せども、それよりはじめて、あらち山とぞ申しける。かの者やがて兜率天に上がり給ひて、八十億劫を経て、その後梵天より天下り、敦賀の津に、気比大菩薩と現れて、北陸道を守護し給ふも、さながら恋路と承れ。

御曹司が浄瑠璃姫に古今の恋の例しを語って自らの思いを受け入れてくれるよう口説く場面。二人が結ばれたとする点に変わりはないが、『浄瑠璃物語』諸本により上人譚に相違が認められる。(一七)ごく単純化すれば次のようになる。「八十三歳の上人が十七歳の御息所に恋してイ結ばれ、愛発山で出産するが異常児であり、ロのち気比大菩薩となる」（イに上人が竹生島で祈願とする本があり、ロに中天竺（前掲では兜率天）を経るとする本がある）。姫との会話の中、御曹司が「及ばぬ恋」の例として繰り出す説話は数多いが、この箇所では三蔵と波斯国王姫宮、志賀寺上人、小町零落、柏木と女三宮がひとまとまりとして語られる。

⑰『西行』（岩波新日本古典文学大系『室町物語集』上）

我が朝、志賀寺の上人は、京極の御息所志賀寺の花見の下向の時、車の物見より御息所の御姿を人目見奉り、思ひに憧れ、御車の返り給ふ後に付き、そら恐ろしけれども都まで御供申、中門に佇み給ふ。女房達、「如何なる人ぞ」との給へば、上人答へて曰く、「我は是、志賀寺の上人なり。車の物見より御息所の御姿を人目見奉、これまで参りたる」由申給へば、女房達、この由申させ給へば、御息所聞こし召し、「さ様に上人と申す程の人是まで来り給ふ事、

よくよくの心なるべし。人の思ひ程恐ろしき事は無し。さらば、日隠まで呼びて手を与へて帰さん」と、南殿の日隠の前へ召されて御簾の内よりさしも厳しき手を出し給ふ。「上人、是を御情とし給へ」と仰ければ、上人は、御手を給候御情のわりなさの程を観じ、涙に咽びつつ、時しも春の初めなりければ、思ひ連ねてかくばかり、「初春の初子の今日の玉帚手に取るからにゆらく玉緒」御息所、御返事に、「よしさらば真の道にしるべして我を誘へゆらく玉緒」と御返事ありければ、上人、忝御心ざしかなと思召、それより志賀寺へ帰らせ給ひ弥大道心起こし、「御息所とも仏に成し給へ」と祈り給へば、誠にその報ひにや、御息所も有難く成仏の本意を遂げ給ふ。

病に伏す西行をそらさやが宮中から見舞いに来た場面、そらさやの語り。「もし又恋といふ心ぞや。さもあらば、心深くてかなふまじ。昔もさる例しあり」と語る恋の例し尽くしの内。この箇所が今回見出した最も長大な上人譚であるが、本作品が必ずしも個々の挿入説話に筆をさくわけではない。前掲引用箇所の前後は次のようである。

……唐の玄宗皇帝の楊貴妃、一行阿闍梨と名を取り給ふ。一角仙人は玉女に近づき、一期の行、又は業を失ふ。(前掲、志賀寺上人譚)三河の寂照定基は、赤坂の遊君に契りを結びしが、遊君に別れて後は道心を起こし、入唐渡天を遂げ、石橋を渡りぬ。弘法大師より後、此の橋を渡る人は二人ありけり。柿本紀僧正、染殿后を恋ひ、御手洗川に寝覚めして、青き鬼と成り給ふ。……

楊貴妃と一行阿闍梨、一角仙人と玉女、あるいは寂照と遊君、柿本紀僧正と染殿后などが引かれるが、それぞれの説話の骨組みだけを記す叙述は、たとえば前節の『源平盛衰記』に挙げた上人譚の前後、「震旦には、……唐の玄宗皇帝の楊貴妃は一行阿闍梨に心をうつして、咎なき上人を流し給ふ。吾が朝には……文徳天皇の染殿后は清和帝御母儀、太政大臣忠仁公の御娘なり。柿本紀僧正御修法の次に思ひを懸け奉り、紺青鬼と変じて御身に近付きたりけん」といった箇所と似た態度であって、『西行』にあって上人譚が例外的であることがわかる。比較的丁寧に書き込まれた文章表現は何らかの典拠によっていると考えられる。加えて上人が発起し、御息所も成仏を遂げたと語り収める点は、『いそざき』に引かれた西行自身の物語、「西行法師も女院を恋奉り、少しの御情けの忝なさに道心を起こし、諸国を巡り、行ひすまして女院をも助け奉り、我が身も成仏しけるとかや」という叙述に重なる面もある。本筋である『西行』を中心として入籠型にそういった梗概化した西行の物語の影響もあ

るのかもしれない。

参考とした仮名草子二作品は次に簡略に挙げる。

⑱『恨の介』（日本古典全書『仮名草子集』上）

是は古への志賀寺の、その上人はいたづらに二条の后を恋い伏して御手ばかりたまはる。

恨の介から姫への口説きの手紙。「よしなき恋」の例として、夏虫火に入る故事とともに記される。

⑲『薄雪物語』（同右）

むかしもさる例しあり。志賀寺の上人は八十三の歳、京極の御息所を恋奉りて、大内山にたたずみ給ふ。后はあはれにおぼしめし、御簾ま近く召されつつ、瑠璃をのべたる御手ばかりをさし出し給ふ。上人炭の折れのやうなる御手ばかりにて、后の御手を取り、額に押しあて引きて一首、「いざさらばまことの道のしるべして我を誘へゆらく玉の緒」とあそばしたると申候まま、……

薄雪から男への拒否の手紙。本来御息所の歌を上人の詠とし、別れの歌と読み替えている。

以上、志賀寺上人の恋という同一の素材ながら、叙述方法はそれぞれに異なっていた。概して一編の物語を立ち上げようとする姿勢よりも、ほんの一瞬でも想起されれば用を果たす一片の知識としてのあり方の方が要請されたことがうかがえるのではなかろうか。そして何よりも、恋の物語として肯定的にも否定的にも、正反対といえる両方の文脈に乗せて語られたことが特徴といえる。

では志賀寺上人譚と同じく「恋の例し」に挙げられる他の説話の状況はどうか。いま柏木と女三宮、柿本紀僧正と染殿后の場合を取り上げてみる（本文は略すが上人譚と同程度に簡略な描写である）。(一八) 柏木と女三宮の場合、一目惚れの例、秘めた恋の例、恋に身を失う例に挙げられ、拠り所である『源氏物語』の世界そのままの反映である。また柿本紀僧正と染殿后の場合は、僧の恋、紺青鬼説話として語られるものであり、こちらも原話からの離れ具合、読みの転換はみられない。おそらく源である物語の拘束力の強さに基づくのであろうが、展開のない分、これらの説話が引用される文脈も志賀寺上人譚ほどの幅をもたない。

四

では個々の作品に描かれる上人譚をその構成要素に分析し、その語られる文脈、上人譚に要請された意義を確認してみたい。次の項目を立てて試みる。

A　1外出する御息所　　2御息所を見初める上人
　3御息所を訪ねる上人
B　上人に手を取らせる御息所　　C　上人の歌句
D　御息所の歌句　　E　後日談
（上人が御息所に恋する描写はA2とした。Eは上人が満足帰参して以降の展開とみられるもの。多少の差は生じるかと思うが、本文の叙述に沿ったものである。）

さて表（次頁）にまとめると、お伽草子作品において求められた志賀寺上人譚がわかりやすくなるだろう。つまり、上人と御息所の出会い、再会（A1、A3）や和歌の贈答の描写（C・D）の取捨は自由であって、必須の項目としては、御息所に恋する上人の姿（A2）とその上人の思いに対して手を取らせる御息所の行為（B）であった。後日談（E）を付するのは語り手の意図した文脈に沿わせるための読みの方向指示である。

上人・御息所の歌句にこだわらない引用が半数に及ぶというのは、本話が「初春の」歌に対する注釈説話の位置からは離れてあることを示している。(一九)

また表の下段に示したように、登場人物の語りの中に用いられることが多い。ここで誰が語るのか、その語り手によって上人譚の用いられる意義にある傾向がみられる。「恋の例し」だから当然といえば当然なのだが、語り手が男の場合、相手は女で上人譚は「口説く」ため、自分に都合がよい例―恋の成就した例し―として使われる。反対に語り手が女の場合、相手は必ずしも男というわけではない。相手が男の場合は「恋の先例」を教え、相手が女の場合は先例を教えることに加え、その聞き手が迷う恋を受け入れることを勧める理由の一つとして用いられたようである。

本文中の上人譚について、前に「一編の物語」よりも「一片の知識」としてのあり方と述べた。表に戻って、後日談（E）は上人譚引用者の主張であるから除いて、あらためてそこに記された物語を見直すと『横笛物語』『雀さうし』の間にその構成要素の多寡から一線を画することができよう（もちろん今の考察に限っての便宜的な操作である）。

大まかにその傾向をみると、後半グループでは歌句が記される。また全体に叙述が長くなっており、上人は恋し、御息所はどう対処したか、と双方の行為が描き出されている。

それに対して前半のグループは、二人の名とその間に交わされた一つの行為をほぼ一文で描ききる。偶然の出会いから思いに堪えきれず参内するまでの経過はすでに物語の中に解消されて当然の前提となっており、上人から御息所への恋がそのままに投げ出される。

作品	A1	A2	A3	B	C	D	E	物語の場〈文脈〉
じぞり弁慶		○						熊野別当心中語
秋月物語		△		○				愛子から愛敬への語り〈諭し〉
判官みやこばなし				○				義経から姫への語り〈口説き〉
みなつる		○		○				義経からみなつるへの語り〈口説き〉
大原御幸				○		○		建礼門院の六道語り〈内省〉
赤松五郎物語		○		○				五郎から尼公への語り〈口説き伝言〉
御茶物かたり		○		○				茶の効用〈延命〉
道成寺物語		○		○			○	序・物語への導入
いそざき		○		○			○	跋・物語後の評語
横笛物語		○		○			○	序・物語への導入
雀さうし		○	○		○	○		鳩から雀への語り〈口説き〉
たまむしのさうし		○		○	○	○	○	いほむしから玉虫への恋文〈口説き〉
ひめゆり		○	○	○	○		○	牡丹局から姫百合への語り〈諭し〉
はにふの物語		○	○	○	○	○		弁の局から姫への語り〈諭し〉
愚痴中将		○	○	○	○	○	○	母から中将への語り〈諭し〉
浄瑠璃十二段草紙		○	○	○	○	○	○	義経から姫への語り〈口説き〉
西行	○	○	○	○	○	○	○	そらさやから西行への語り〈諭し〉
恨の介		○		○	△	△		恨の介から姫への手紙〈口説き〉
薄雪物語		○	○	○				薄雪から男への手紙〈拒絶〉

（『秋月』の△は「人の思ひを懸からじ」を上人の恋と解したもの）

（『薄雪』の△は「いざさらば」歌を上人歌とすることによる）

否定的な意義をもって上人譚を用いている『道成寺物語』『いそざき』『横笛物語』と、『みなつる』『赤松』など逆に我が恋の成就を願って語られる場合も同じように要素の少ないグループに属す。それは語られる一説話を良否のない条目的なレベルにまで表現内容をそぎ落としてこそ可能なのであり、出来上がった説話の意味の可変性を存分に生かした利用法ということができる。

そして物語は、『秋月』「御息所は……御手ばかりを結び給ふ」、『判官』「京極の御息所は……御手ばかりを許し給ふ」、あるいは『道成寺』「志賀寺の上人は……恋慕して……浮き名を流し」『いそざき』「志賀寺の上人は……恋奉り……三界を流浪し給ふ」などのように、上人か御息所か、どちらか一方に重心を置いての語りを構える。特に御息所を中心として語っている場合、上人譚を引用する作品において、「だからあなたも私に（あの方に）心を開いて……」というわけである。上人譚の中での主体的な行為者を変更することで、語り手が本話を使用する意図を明確にしているのである。

一つの事柄しか述べられていないこと、そうした物語叙述の変化の中で取りこぼされていったものは多いだろう。出会いの場面や上人の容姿がそれであり、心理描写もその一つである。『ひめゆり』にこそＡ２からＡ３にうつる間の描写は詳しい（それは続く退廃への序となる）が、それ以外では上人の苦悩はほとんど顧みられず、御息所が抱いたであろう驚きも描かれることはない。二人の心理描写が省略された物語の展開は単線的である。

ここでお伽草子作品以外での上人譚の構成を確認しておくと、『俊頼髄脳』がＡ１～Ｄを備えているのは当然として、

『とはずがたり』＝（Ａ２）・Ｄ
『宝物集』＝Ａ１・Ａ２・（Ａ３）・Ｂ・Ｃ
『源平盛衰記』＝Ａ１・Ａ２・Ｂ・Ｄ
『三国伝記』＝Ａ１・Ａ２・Ｂ・Ｃ・Ｅ

などとなり、御息所の外出から語り起こす点に特徴があるが、組み立て・文章表現は、後半グループのお伽草子中でのあり方とほとんど変わらない。歌学書が『俊頼髄脳』に依ることを明らかにしつつ同話を始めるのに対して、如上の作品ではすでに知識としての利用に傾いていたといえるだろう。ただし、そこには上人譚の方向を決定する「行業を譲る」の一句が加えられてのものであった。

お伽草子に用いられる上人譚では、それ以前の物語中で読みの分岐点となった「行業を譲る」という語句をもつものは一例もない。それは本説話の捉え方が異なっていることを示す。繰り返すことになるが、お伽草子中の上人譚は、あくまで骨組みだけが整えられたわけである。

ほとんどの場合、読者の前にはその上人譚を語る男女の恋愛の物語が展開しつつあるのであり、求められる上人譚は例証の一つ、やはり傍流でしかない。この点、『宝物集』などの作品も上人譚を先例に持ち出すことに変わりはないのだが、その場合、上人譚が恋する・される二人の間ではなく、語り手の主張（多くは仏教者としてふさわしい態度から繰り出される言辞）を連ねる文脈中にあることが大きく異なる。

ところで、かつて御息所は訪ねてきた上人の容姿に驚き、その申し出に従って手を差し出した。お伽草子ではその間の描写を省筆する。そして御息所が手を差し出すにあたっては別の理由を用意している。心理描写を削り条目化する叙述の中で、それでもわずかに御息所の心の動きにふれるとき、「人の思いは恐ろしい」意の句を加えているのである。

前掲本文では『秋月物語』（「人の思ひを懸からじとて」）『ひめゆり』（「人の思ひを蒙るは恐ろしき事也」）『西行』（「人の思ひ程恐ろしき事は無し」）で御息所が上人への対処をどうするかということに、判断基準として思い起こしている。また『たまむしのさうし』ではいほむしが恋文に、自分との交際の利点として「一は御利益、二には人の思ひを懸かり候ては末の世の障りとなるべし」と綴り、『はにふの物語』では弁の局が姫に諭す別の箇所に「人の思ひの積もる行末恐ろしさよ」と語る。『ひめゆり』では前掲上人譚の後、人間と動物が契りを結ぶことも「前世の報い」であり、「いはんや人間にをひてさのみ思ひを蒙ること罪深し」ともいう。さらに『秋月物語』では「恋を受けぬは鬼、物狂いとなる」との句もみえる。

別に、『をこぜ』のおこぜ姫に恋した山の神の文にある「思ひの末の残りなば、君が身の上いかにせん。せめて手ふれしるしとて、御返事給はらば、御うれしくあるべし」、『鴉鷺物語』の「返歌せぬは七生舌なし」といった表現も、人を恋う思いの強さ、その人から懸けられた思いを邪慳にする報いをいうものであって、一脈通じるものがあろう。(二〇) 恋した人が心中穏やかでないのと同様に、その思いを懸けられた方も大変なのである。

これらはお伽草子を生み出し育てた中世末から近世初期の時代、社会の人々による付加と認められるだろう。いうまでもなくお伽草子では公家の恋愛だけでなく、神仏から動物、植物、昆虫にいたるまで、命あるものそれぞれの恋愛が取り上げられ、物語に仕立てられる。また個々の本文で上人譚の前後に記される説話を挙げたが、それはお伽草子作品を享受した人々が様々な恋の物語を知っていたことの証でもある。

恋が人に及ぼす影響、そのエネルギーの大きさに対す

る認識がある。ここに「行業を議る」上人の一方的な恋の物語から、恋をする・される男女双方に関わる「人の思い」をいかがするかという物語への展開が認められるのではなかろうか。

以上、まだまだ遺漏があるだろうし、今後の検討に残される部分もあるが、ひとまずは、志賀寺上人説話が、中世末から近世初期の時代の表現をまといながら、「恋の例し」の代表の一つとしての姿をみせていることを確認しておきたい。

〈注〉

（一）国会図書館本『和漢朗詠注』（和漢朗詠集古注集成二）「子日」の項に引かれる志賀寺上人譚では、京極御息所を「天下一美人ニテ」と形容する。

（二）志賀寺上人譚にふれる歌学書、注釈書（主として近世以前）として次の作品を確認した。

『俊頼髄脳』・『和歌童蒙抄』巻二「子日」項・『古来風体抄』（初撰本・再撰本）「初春の」歌注・『和歌色葉』四七「初春の」歌注・『八雲御抄』巻四「初春の」歌注・『歌林良材抄』下「玉はゝき事」・『藻塩草』巻一七「著」・『釣舟』「初春の」歌注・『伊勢物語集注』一段（古歌をもって詠むこと）・『和漢朗詠集和談鈔』「恋」一九二歌注・国会図書館本『和漢朗詠注』子日項

（三）『七人付宗祇判詞』（連歌貴重文献資料集成）では「恋になくさむ老の哀さ」に対して日与が「人毎にゆらく玉の緒暮待て」と付し、「老の哀さと云所折角をよくとれりこゝにゆらくとをきたる寄特なり」と判じられている。

また、恋や子日とは直結しないが、正徹は『草根集』に志賀寺上人譚に基づく歌を多く残している。

しがの山ここや聖のあとならむ霞にゆらく玉のをやなぎ
（一〇〇一・古郷春）

手にとらぬ初音のけふの郭公これにも又やゆらく玉のを
（二一三四・初郭公）

跡ぞなきゆらく玉のを年をへて浪のみこゆる志がの古寺
（八七二五・古寺）

他にも二一三三、一〇二五六、一〇二五七などが数えられる。

ところで『万葉集』巻二十「雑歌」に収められる大伴家持の「初春の」歌（四五一七）は、正月内裏の宴にて詠まれたものであり、賀の歌である。それゆえ、「初春の」歌を本歌として詠まれた歌には『堀河百首』の仲実「玉ばはき春のはつねに手折りもて玉のを長くさかゆべらなり」（二三・子日）や『正治初度百首』の源通親「たまばはき千とせの春をいはひても子日のまつはあたりはらはん」（五〇八・春）、俊成「たまはばきはつねの松にとりそへて君をぞいはふしづのこやまで」（一一〇七・春）などのように賀、子日

を詠んだものが一方にはある。

（四）歌学書に伝えられる志賀寺上人説話で『俊頼髄脳』にない文句が加えられるのは、『袖中抄』のこの箇所だけと思われる。他作品でのあり方と比較する場合には注意すべき点だろう。

この「譲る」という語については口頭発表時に先生方からご意見をいただいた。ここにいう「譲る」とは『袖中抄』にいう「廻向」するという意味に近く、「譲る」ことで上人の積年の行業がなくなってしまうのではなく、それがまた上人自身の徳を高める行為でもある、ということであった。本来的にはそうであろうし、『俊頼髄脳』の互いに「弥陀の浄土」へと約束された時点での語りもそこから外れてはいないと思う。しかし、以下本論の中でみるように、本話が次第に「僧と恋」という観点から語られ出すようになると、上人像が純粋、清廉な姿から愛欲の為に何もかも投げ出してしまう、破戒、堕落の僧へとずれていく向きもあるのではないかと考える。したがっていま読む『宝物集』の「ゆづ」るを献身的にではなく、むしろ私欲のために「他事一切を顧みることなく投げだし与える」と解するわけである。物語が伝えられていくなかで微妙な心の交渉を描ききれ、かつ受け止めきれていたであろうか。しばしば柿本僧正説話と並置される志賀寺上人の姿（以下にみる列挙説話の中ではもちろん、『榻鳴暁筆』巻一三「怨念」には「六京極御息所」「七柿本紀僧正」とあり、『そしり草』でも「六真済」「七朝観」とある。『とはずがたり』については保留）が、両話とも「僧と恋」というにとどまらず、次第に恋に迷った僧と見なされていくのを証しているのではないだろうか。高僧とその心を受け入れた貴女の節度ある応対を語る姿勢が、かつてはあったことを認めながらも、ここでは志賀寺上人に、情欲の虜となった先例としての姿を認めたいように思う。その極端な例が、作品自体の姿勢の問題もあるが、『そしり草』で上人を「悪僧」、御息所を「淫婦」、さらには二人の交渉を「手を取かはせし計にはあるまじ」とする記述に表れているのではなかろうか。発表時には資料・時間的に説明を尽くせなかったところがあるが、ここに再考したところを記し、ご叱正を請いたい。

（五）志賀は『古今集』紀貫之歌（一一五）「志賀の山越えに女の多く会へりけるに詠みてつかはしける　梓弓春の山辺を越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける」以来桜の名所として知られる。また上人と御息所の出会いの場について梁瀬一雄氏は「志賀寺―俊頼口伝集・宝物集・源平盛衰記・太平記、比叡―三国伝記、北野―枕物狂」の三分類を示された（「狂言『枕物狂』の一考察―志賀寺上人と紀僧正」『説話文学研究』所収）。さらにいま『延慶本平家物語』「日吉詣給ケルニ」、『新古今聞書』（東常縁）「志賀の花御覧におはしましし」、国会図書館本『和漢朗詠注』「志賀寺へ詣

リ給タリシ」の例を加えることができる。

（六）また『延慶本平家物語』にも同様の描写がある。「亭子ノ院ノの女御京極御息所ハ、時平ノ大臣ノ女也、日吉詣給ケルニ、志賀寺聖人心ヲ奉テ懸、今生之行業ヲ奉譲シカバ、哀ヲ懸給テ御手ヲタビ、「実ノ道ノ指南セヨ」トスサマセ給キ。」（勉誠社）

（七）神野志隆光「紺青鬼攷―特に真済をめぐって―」（『国語と国文学』昭和四八・一）、稲垣泰一「高僧破戒譚の二つの形―真済・志賀寺上人・久米仙人・湛慶・浄蔵譚を通して―」（『金城学院大学論集国文学編』昭和四八・一二）、小峯和明「怨霊から愛の亡者へ―位争い伝承の変転」（『説話の森』所収）、等参照。

（八）『拾遺往生伝』中一「大法師浄蔵」には染殿后と金峯山上人、柿本紀僧正の関係と同じく、京極御息所が浄蔵の護法によって病平癒をえたという説話を伝える。

（九）近世の志賀寺上人譚（『艶道通鑑』（日本思想大系『近世色道論』）の補注参照）では上人を「朝勧」（『艶道通鑑』『広益俗説弁』）「朝観」（『そしり草』）、「朝寛」（『夢想兵衛胡蝶物語』）とするものがあるが、『河海抄』にいう「朝勲上人」を上の「滋賀上人」の名と解することができれば、上人の名を付した最も早い例といえる。

（一〇）朗詠注中の上人譚ということでは、黒田彰氏は見聞系朗詠注にみえる上人譚から宝物集との関連、また注釈世界の広がりを示された（「注釈　中世注釈史の一班―見聞系朗詠注について」『説話の講座』3所収）。

（一一）個々の作品についての論考は、その一々にふれえないほどの数に上るが、一括的な論考として石川透「室町時代物語における『伊勢物語』享受」「室町時代物語における『古今和歌集』享受」（『室町文学纂集』一・二）がある。

（一二）注七に挙げた三氏の論考の他、志賀寺上人説話についてお伽草子作品をも含めた先行研究に次のものがある。片桐厚子「志賀寺上人説話が後世文芸に与えた影響について」（『立教大学日本文学』昭和五二・一二）、米沢美佐「『薄雪物語』にみられる志賀寺上人説話をめぐって」（『中世近世文学研究』昭和五四・一）

（一三）森正人「場の物語・無名草子」（『中世文学』二七昭和五七・一〇）。

（一四）一方謡曲の中では『恋重荷』との関連が考えられるものの、志賀寺上人を直接の題材とした曲はなく、『氷室』の詞章に「手に取るからに揺らぐ玉の、翁さびたる山陰の」とある程度である（前掲注六梁瀬論文）。

（一五）石川透「室町物語の成立背景―『雀さうし』の成立―」（『國學院雑誌』平成三・一）、前掲注七小峯論文にも言及あり。

（一六）『ふくろう』と上人譚の関連は、市古貞次「艶書小説の考察」（『中世小説とその周辺』所収）に指摘がある。

（一七）『浄瑠璃物語』諸本は森武之助『浄瑠璃物語研究』参照。

（一八）私見では「恋の例し」としては業平と二条后が最多、次いで多いのが志賀寺上人と思う。柏木と女三宮は『猿源氏草紙』『花子ものぐるひ』『四十二の物あらそひ』『鴉鷺合戦物語』『高野物語』『朝顔の露』『浄瑠璃十二段草紙』『大原御幸』『みなつる』、紀僧正と染殿后は『浄瑠璃十二段草紙』『雀さうし』『愚痴中将』『大原御幸』『西行』『是害房絵』『善界坊絵詞』などを参照。

（一九）同時代の歌学書『歌林良材抄』（一条兼良）『釣舟』（室町末期）でも条目化がみえる。

『歌林良材抄』「又能因法師の大納言経信卿と語りける説云、京極の御息所を志賀寺の老法師恋奉りて見参申しける。御息所の御手を給て、此歌を詠じ侍といへり。」（日本歌学大系）

『釣舟』「京極の御息所を志賀寺の上人恋ましまして、御息所の御手を取りて詠まれける歌となん申侍けり」（続群書類従）

（二〇）他にも同様の表現として次の例も挙げられる。

『横笛物語』「……されば小野小町は、人の思ひの末とをり、後にはあさましき身となりたるよしうけ給はる。殊更わりなきは、此恋の道とこそ申し侍る。」（日本古典文学大系）

『鼠の草子』「小六、申けるは、人の方より文をえて返事せぬ人は、来世にては深き咎と承り候」（室町時代物語大成十三〇五）

（付記）本稿は、関西軍記物語研究会第三十七回例会（平成十一年十二月十二日・京都女子大学）での発表をもとに成ります。席上貴重なご意見を下さいました先生方に感謝いたします。

（しばた　よしなり・博士後期課程）